

タスク（設問）に着目した英語読解の指導法 －教科書分析における課題と考察－

八木慶太郎¹⁾・伊藤 秀子²⁾・波多野和彦²⁾

本研究は、アカデミック・スキルの基礎・基本として重視されている「読む」技能の育成を図る指導法を考察するための一助として、高等学校の外国語（英語）科の1科目「リーディング」の教科書を検討した。1996年度版の教科書26冊を対象として各課末に付されている設問を分析した。高等学校の教科書を対象としたのは、外国語の指導を体系的かつ適切に行う上で中等教育と高等教育との連続性を考慮することが重要であり、大学での読解指導の指針を検討する際に学習指導要領に規定されている「リーディング」の目標・内容が参考になるためである。こうした点を踏まえつつ、①読解指導の概念、②学習指導要領に示された「リーディング」の目標・内容、③読解過程についての考え方、④読解指導の過程についての考え方、をそれぞれ検討した。その後に実際に設問の分析を実施した。

設問を帰納的に分類し、最終的に14種類の設問カテゴリーにまとめた。設問としては、「多肢選択・組み合わせ」、「空所補充」、「問答」、「正誤問題」、「文の内容についての追跡調査」、が上位を占めていることが明らかになった。また、Nuttall(1996)を用いて細かく検討した「問答」については、「推論を要する問い」が多く、「書き手の表現技巧についての問い」や「書き手の文章の評価」が少ない、ということが明らかになった。

キーワード

教科書、タスク（設問）、学習指導要領、批判的な読み、読解過程、読解指導の過程、メディア・リテラシー

1. はじめに

大学における学習では、アカデミック・スキルのなかでも特に（外国語で書かれた）文献を「読む」技能が従来から強く求められている。「コミュニケーション重視」のパラダイムと、1991年改訂の現行大学設置基準で示されたカリキュラム弾力化の方針に対応して、カリキュラム改編が著しい外国語（特に英語）教育でも、講読関連の科目は中核として位置付けられており、専門課程でも

「原書講読」の類の科目が設置されている。演習で専門分野の原書講読を活動の中心とする例も多い。

こうした背景には欧米の近代的学問の摂取が重視されてきたという事情や、優れた文章の読解によって得られる教養教育上の効果といったこともさることながら、「読む」技能は「聞く」「話す」「書く」「考える」といった技能の基盤にもなっている、という考え方が暗黙的にカリキュラムに反映されていると考えられる。実際、論文執筆、発表、討論などといった発信的な活動も準備段階で「読む」行為を伴わなければ成立し得ないものである。このような意味で、読解力の育成は、今後

1) 図書館情報大学大学院情報メディア研究科博士後期課程

2) メディア教育開発センター

の高等教育においても重要な位置付けであることは明らかである。

また、「読む」ということはコミュニケーション行為の一環であり、そこには必ずメディアが存在する。従来から外国語教育では、教科書は勿論のこと、新聞、雑誌、テレビ、web上の情報等、様々なメディア・テキストが活用されてきた。多様なメディア・テキストを教材とした読解力の育成を通して、メディア・リテラシーの育成も図ることが、現代の外国語教育の重要な課題の1つとなっている。

高等教育でこの重要な読解力の育成を今後どのように行っていくべきか、ということを考えるには、その前段階である中等教育でどのような読解指導がなされているかを知ることが有用であり不可欠である。適切な指導を行うためには、外国語（英語）の習得をめぐる問題について、学習者の立場に立脚した長期的視野から検討することが必要だからである。また、高等学校の卒業生を受け入れる大学側にとっては、高等学校の教育課程を規定している学習指導要領の意義と内容についての理解が必須である。

現行の高等学校学習指導要領は1994年度から施行されている。そこでは、コミュニケーション能力の育成を重視する立場から、日常会話、リスニング、スピーチなどを扱う「オーラル・コミュニケーション」という科目が新設された。また、文字によるコミュニケーションも重視されており、「リーディング」、「ライティング」が設けられている（文部省、1989、pp.6-10）。

2003年度から施行される新学習指導要領は、現行の方針をさらに強化するものとなっている。そこでは、「実践的コミュニケーション能力」の育成、という目標を掲げている。「実践的」という語が用いられているのは、実際に学習した外国語を使用する、という側面をより強調するためである。また、このような能力がどの生徒にも必要であるという認識に基づいているためでもある。中等教育での外国語科は必修化され、特に中学校で

は、英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として用いられている実態を踏まえ、原則として英語を履修させることとなった（文部省、1999、pp.3-9）。

このような状況下、大学側としては、中等教育における外国語科の動向をどのように受け止め反映させていくかということが重要な課題となる。特に、入試問題の改善は急務である。中等教育段階の外国語教育がコミュニケーション能力の育成を目指している以上、細かい文法的知識を問う問題ではなく、実際に外国語でコミュニケーションできる能力を問う問題を中心とすべきである。このためには、学習指導要領の規定に基づいて作られている中学校・高等学校の教科書を検討し、どのような内容でコミュニケーション能力の育成を期しているかを見極めることが必要である。また、教科書は学習指導上、現在でも最も基本的かつ重要なメディアである。教育場面では多様なメディアを扱うが、ベースとなるのは何と言っても教科書だからである。印刷メディアとして、また教育メディアとしても伝統ある教科書を検討することこそ、外国語教育を通して培ったコミュニケーション能力を、メディア・リテラシーに導くための方法を考究するための第一歩ではないだろうか。

そこで本研究では、上述の事項を踏まえ、検討の手掛かりとして高等学校の外国語（英語）科の1科目「リーディング」の指導内容を対象とした。指導内容は教科書に何を用いるかによって限定される部分が大きいのので、指導内容を検討する上で使用されている教科書を分析することが重要な方法ということになるからである。「リーディング」を対象としたのは、「読む」活動に重点を置く科目であり、究極的には「内容を読み取って、それについて自分の考えなどを話したり、書いたりすること」を通して、文章を批判的に読む能力の育成を目指す科目と位置づけられているためである（文部省、1989、pp.50-51）。メディア・リテラシーの核となる「クリティカルな読み」を学ぶ

には最も適切な科目といえる。

「リーディング」の教科書の分析の方向性としては、①教科書の実態、②挿絵の効果、③題材、④文章の難易度、などが考えられる。ここでは先ず指導の実態を知ることの重要性に鑑み、教科書の実態を特に設問の内容に注目して分析した。指導上の重要事項が設問で問われるからである。特に現行学習指導要領と読解過程、読解指導の過程についての考え方に照らして、現行教科書の特色と問題点を検討し、読解力の育成の在り方を模索した。

2. 読解指導についての考え方

2.1 読解指導の2側面

読解指導には、①「読む」という言語活動を学習者に行わせるための指導、という狭義的な側面と、②学習者の「読解力」を向上させるための指導、という広義的な側面がある。読解指導という場合には、常にこの両面を念頭に置く必要がある。

①はあくまでも「読む」という作業を伴う指導、換言すれば「読む」ことによって読む力を伸ばすことであり、この作業と独立した形で行われる語彙や文法についての指導は含まない。この場合の「読む」には、黙読の他、音読（内容理解を目的とする場合）も含まれる。

これに対して、②は語彙や文法についての指導は勿論のこと、読解力向上に資すると考えられる活動は全て含まれ得るが、これを分析の対象とする場合は、読解力の決定要因をどう捉えるかによってそれが異なったものとなる。例えば、語彙・文法の指導が決定要因であると捉えるならば、教科書で語彙・文法がどのように扱われているかを分析することが、読解指導の実態の分析の一環ということになる。一方、語彙・文法は重要であるが、読解指導の本質は寧ろ語彙・文法だけでは説明されない部分に触れることの方にあると考えれば、語彙・文法の指導は分析の対象に含ま

れないことになる。

ここでは、「リーディング」という科目名の下でどのような指導が行われているかを知ることが目的とするため、①と②の両面を視野に入れ、②については語彙・文法の指導を対象から除外する後者の立場に立脚した分析を行うことにした。

2.2 高等学校「リーディング」の目標・内容

「リーディング」は1989年に改訂された現行学習指導要領から、それまでの「英語ⅡB」に代わり設けられた、読解を中心とする科目である。「リーディング」の目標を「書き手の意向などを読み取る能力を一層伸ばすとともに、英語を理解しようとする積極的な態度を育てる」としている。

内容は、①「まとまりのある文章の概要や要点を読み取ること」、②「目的に応じて文章の内容を整理して読み取ること」、③「内容を読み取って、それについて自分の考えなどを話したり、書いたりすること」、④「文章の内容に応じて適切に音読すること」である。活動の中心は読むことであるが、それだけにとどまらず、「話す」「書く」ことも意図したものになっている点が重要である。現行学習指導要領は、コミュニケーション能力の育成を重視している点が大きな特色で、「オーラル・コミュニケーション」という科目の新設が注目されたが、「リーディング」も同様にコミュニケーション能力の育成の一環として位置付けられているからである。先ずテキストを通じて書き手と読み手が「コミュニケーション」を図り、さらに読み手同士が意見交換などの形で「コミュニケーション」を図ることが主要なねらいとなっている。

さらに、その際に注意すべき「内容の取扱いの指針」としては、①「言語材料の理解だけに止めず、内容の把握を重視して指導するものとする」、②「文章や段落の構成、文脈の展開などを踏まえて読み取るよう指導するものとする」があげられている。単なる和訳だけに終始してはならないと

いうことが、ここでは示唆されている（文部省、1989、pp.49-52）。

2.3 「読解過程」と「ストラテジー」の活用

実際にこうした学習指導要領の趣旨を踏まえた読解指導を展開していくには、どのようなことに留意すべきであろうか。

「文章や段落の構成、文脈の展開などを踏まえて読み取る」ということは、孤立文の操作過程をこえた段階である。読解過程はこの段階から始まる。そこで、まず教師自身が読解過程とはいかなるものか、その概要を知ることが必要である。次いで、その過程にそったストラテジー¹⁾を考案し、それを学習者に分かつことである。その上で生徒各自の読解過程を注視し、それぞれに適した助言を与え、補強しながら、やがて自力で内容把握の喜びに到達するよう導いていかなければならない（天満、1989、p.75）。

従来の読解指導は、多くの場合いわゆる「文法・訳読法」で行われてきた。単語と文法の知識を手掛かりにした「解説」であり、受け身的に1つ1つの文を分析していく読み方である。しかし、各文は様々な意味関係（原因と結果、例証など）に基づいて配列されているので、段落相互の関係と論理の展開が分からなければ、文章全体を真の意味で理解することはできない。真の意味での「読解」は、単一文の「解説」の積み重ねに終始するのではなく、パラグラフや章、さらには本文全体に至る、より大きな文章単位において初めて成立するものであることを心得る必要がある。

このような読解ストラテジー（Reading Strategy）は「読み手がテキストに接し、読んだ内容を効果的に理解していく際の心的な操作である」と定義されている。また、第二言語読解のストラテジーと読解力の関係についての検討から、ストラテジーを活用している被験者の方が、未活用の被験者に比べて読んだ内容を正確に理解していることが指摘されている（Barnett, 1988, pp.109-119）。こうしたストラテジーの具体的項目として

は、次のようなものがある（津田塾、1992、pp.25-26）。

- (A) Skimming/Scanning/Making inferences /Contextual guessing/Predicting
- (B) 語彙のストラテジー／統語のストラテジー／意味のストラテジー
- (C) 背景的知識の構築と活性化／テキスト構造の認識

ストラテジーは、文レベルのストラテジーと文章レベルのストラテジーに大別できる。上述の項目でいえば、(B)が前者に、(A)と(C)が後者に相当する。文レベルでの読解では、未知語の意味の推測、文法上の知識の活用、個々の語の持つ意味の把握、といったストラテジーを用いる。文章レベルの読解では、(A)で示されている効率的な読解のための諸技法（いずれも文字や語より、パラグラフのようなより大きな単位での全体的理解を目指しており、既に持っている知識を最大限活用することを特色としている）を駆使しつつ読み進めていく。この過程を円滑にするために重要な役割を果たすのが、(C)で示されている、テキストの背景にある一般的知識や、テキストの構造（論説、物語など）についての知識の活用である。

このように様々なレベルのものが考えられるのであるが、現段階では「ストラテジー」の名称のもとに包括される項目は何か、それをどのように扱うべきか、という点について広くコンセンサスが成立しているとはいい難い。また、ストラテジーの訓練は短時間ではなかなか効果が上がりにくく、学習者要因の影響を顕著に受け易い、とする立場もある（寺内、1994、pp.35-77）。真に読解に有効なストラテジーとは何か、それをどのように指導すべきか、ということを今後さらに研究していく必要がある。

「ストラテジー」という用語を用いている「リーディング」の教科書は5冊あった。また、「ストラテジー」という用語を用いていない教科書でも、文章レベルのストラテジーであるパラグラフ

の構成に触れているものは10冊あり、部分的に導入しているものも含めれば、半数近くの教科書が何らかの形でストラテジーを扱っていることになる。このこと自体は「英語ⅡB」という科目名を「リーディング」と改称し、読み手の主体的な読みの態度の育成を期した学習指導要領の趣旨に沿った教科書が増えていることの現れとして評価できる。

各教科書でおおむね、共通していると考えられるストラテジーとしては、①パラグラフの構成、②Skimming（文章の大意を把握するために、文章全体をざっと通読すること）、③Scanning（特定の情報だけを探して速く読むこと）、④パラグラフの構成の型、⑤パラグラフの展開パターン、⑥代名詞・言い換え表現、などがある。SPECTRUMなどストラテジーを活用させる設問を掲載した教科書も一部あるが、ストラテジーの提示の仕方が教科書により異なることからここでは分析の対象とはしなかった。

ストラテジーを積極的に活用する傾向は、最近の大学レベルの「講読」の授業にも見受けられるようになり、高校レベルでも従来語彙や文法の解説に重点を置いてきた参考書にストラテジーを活用したものが出てきている。

2.4 読解指導の過程

ここまでは読解指導における「読解過程」についての適切な認識の必要性について言及してきたが、最近はそのに加えて「読解指導の過程」についての適切な認識も必要となってきた。これについては1) pre-reading 2) while-reading 3) post-reading という区分が一般的である(Barnett, 1999, pp. 51-53)。今回の「リーディング」の教科書の分析では、この区分に対応した形で、設問を配置している教科書が12冊あった。従来のように課末にだけ設問を配置するのではなく、導入部や中間部にも配置される傾向にある。この3つの指導過程は、それぞれ独立した意義と機能を持つてはいるが、相互間で密接な関連性を持た

せるように配慮する必要がある。

1) pre-reading

導入文・写真・挿絵などを通して、内容の背景的知識を与えること、本文でとりあげられている話題についての読み手の興味を喚起することが主となる。そのため、この段階での設問は、背景的知識についての問いや読み手の興味を引き出す問いが多い。

導入文は全ての課に配置されているとは限らないが、大部分の課に配置されている。本文の内容を要約しながら、読み手に疑問を投げかけたり、たとえ話をしたりするなどの形式をとっている。日本語の場合も英語の場合もあるが、いずれもおおむね1ページ程度の長さである。

写真・挿絵も大部分の課で載せられている。LEGENDのように、写真・挿絵を本文の展開の予測のために用いるようにしている教科書もある。

2) while-reading

読解活動の中心となる部分である。ここでもpre-readingの段階と同様、内容の背景的知識を与える手段として、写真・挿絵が用いられている。他、図表・脚注などが用いられている。図表で本文のキーセンテンスを支える例証やデータを示し、脚注で本文中の人名・地名・歴史上の出来事などを解説している。

この段階での設問は、本文を読みながら適宜、内容の理解度を確認することがねらいとなる。1ページに数問ずつ設問を置く場合もあれば、パートの区切り毎にまとめて設問を置く場合もあるが、設問数があまりにも多いと後述のpost-readingの設問と重複してしまう可能性がある。

3) post-reading

まとめの設問が主となる。内容についての設問と本文中で使用されている語彙・文法についての設問に大別される。この他に本文に関連する文章を載せたり、本文中で使用されている文法事項を整理し、例文を補足して解説したりする場合もある。語彙・文法や読み取った内容の確認・整理・

定着、内容に基づく考察・自己表現などを期している。

この3つの段階のうち、最も重要なのはpost-reading段階の設問である。中核をなす内容理解に向けての活動はwhile-readingの段階でなされるが、それらを再検討し、活動全体を総括する場を設けることが学習効果を高める上で大いに意義を有するからである。

上述のことから、ここでは教科書の課末にある設問を分析することにした。

3. 教科書の分析

3.1 対象

高等学校外国語（英語）科の1科目「リーディング」の教科書（1996年度版）26冊を対象として、各課末に付されている設問を分析した。本文の内容と直接関連しない語彙・文法についての設問は割愛した。

3.2 方法

設問を先ず、求められている解答形式から帰納的に区分していき、最終的に14種類の設問カテゴリーにまとめ、各設問を設問カテゴリーにあて

はめて数えた。1つの設問が複数の種類に跨がるものはそれぞれ1つとして数えた。解答形式による区分を行った上で、post-reading段階の学習活動に沿って、「内容理解の確認」、「読み取った内容の整理・要約」、「読み取った内容に基づく発展的活動」という上位のカテゴリーを設定し、あてはめていった。なお、N. 問答（設問が疑問文になっている）については、1つの設問内に複数のカテゴリーの異なる下位設問群があり、またそれぞれが上述の上位のカテゴリーでは捉え切れない独特の意図を持っていると判断したため、N. 問答の分析に適していると考えられる Nuttall (1996) の6区分を用いた。

N. 問答を除く設問の区分は表1、表2、表3の通りである。

N. 問答の分析に用いたNuttall (1996) の6区分は表4の通りである。

3.3 結果

図1に示す14種類の区分に基づく分析結果からは、A.多肢選択・組み合わせ、B.空所補充、N.英問英答、D.正誤問題、L.文の内容についての追跡調査、が上位を占めていることが分かる。全体的には、内容理解の確認に属するものが多く、読

表1 設問の区分 (1)

【内容理解の確認】	
A. 多肢選択及び組み合わせ	複数の選択肢から該当する選択肢を選んだり、内容上対応する記号・番号などを組み合わせたりする。
B. 空所補充	設問文中の空所部分を埋める。
C. 並べ替え	順不同で並んでいる文章を、時系列など一定の順序に従って並べ換える。
D. 正誤問題	呈示されている幾つかの文を1つ1つ検討し、本文の内容と照らして一致しているかどうかを判断する。
E. 誤りの訂正	呈示されている文章中誤っている部分を見つけ出し、訂正する。
F. 事実と意見の識別	本文から抜粋した幾つかの文を、客観的事実を示す文と書き手の意見を示す文とに識別する。

表2 設問の区分(2)

【読み取った内容の整理・要約】	
G. 分類	呈示されている幾つかの文を、一定の基準に従って分類する。
H. 該当部分の指摘	設問で問われている事項について言及されている部分を抜き出す
I. ポイントのまとめ	設問で問われている事項を、本文の内容に基づいてまとめる。
J. 要約	本文を要約する。

表3 設問の区分(3)

【読み取った内容に基づく発展的活動】	
K. 討論又は意見発表	本文の内容に基づくトピックを設定して討論したり、本文についての意見を発表し合ったりする。
L. 本文の内容についての追跡調査	本文中で試みられている実験・調査等を追体験する。
M. 創作	本文を手掛かりとし、その続きの話や結末等を自由に創作する。

表4 Nuttall (1996) の6区分

a. 語義に即した理解についての問い	本文中の特定の単語や文の意味を適切に答えられるかを問う。
b. 本文の再解釈を要する問い	本文の内容を質問文の内容と照らして再解釈し、問われている事項についての答えを導出する。
c. 推論を要する問い	書き手の意向や本文に直接現れていない結論を引き出すことが求められている。
d. 書き手の文章の評価	読み手の立場で本文の内容や文体などを評価する。
e. 個人的な意見	本文の内容についての個人的な意見を問う。
f. 書き手の表現技巧についての問い	書き手の用いている修辭的な表現技巧を理解できているかを問う。

み取った内容の整理・要約や読み取った内容に基づく発展的活動は少ない傾向にある。その他にも多くの種類の設問が見受けられたが、全体としてみるとそうした設問の占める割合は低い場合が多く、またこうした上位を占める特定の種類の設問だけに集中して、パターンが固定化してしまっている教科書があることも明らかになった。

図2に示す6種類の区分に基づく分析結果からは、c.推論を要する問いが多く、f.書き手の表現技巧についての問いや、d.書き手の文章の評価が少ないことが分かる。

3.4 考察

現行学習指導要領は「関心・意欲・態度」を重

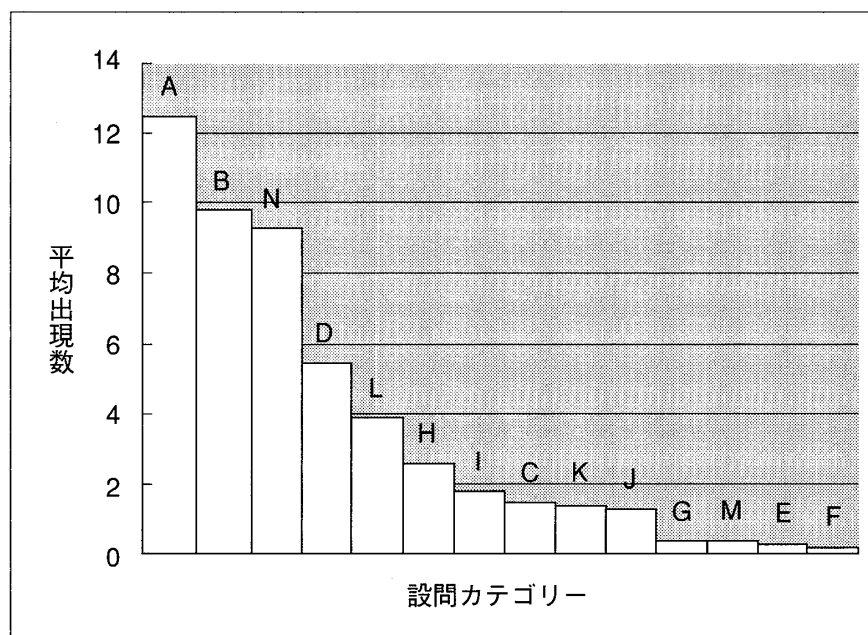


図1 14区分に基づく該当カテゴリー平均出現数の順位分布

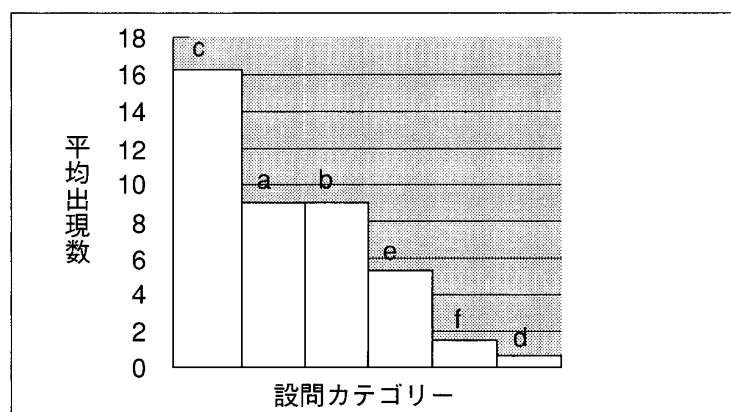


図2 6区分に基づく該当カテゴリー平均出現数の順位分布

視する「新しい学力観」に立脚していることから、教科書の設問にも「関心・意欲・態度」を問うものが豊富に含まれていることが望まれる。「内容を読み取って、それについて自分の考えなどを話したり、書いたりする」活動は、この点からも重要といえる。

メディア・リテラシーとの関わりという点では、「読み取った内容に基づく発展的活動」やN. 問答のなかの特にd.書き手の文章の評価、e. 個人的な意見、f. 書き手の表現技巧についての問い、が重要であろう。これらの占める割合は、上述の結果からみてまだあまり高くない。今後はこ

のような設問をもっと増やすと共に、多様なメディアを対象としてメディア・リテラシーの育成も期するような外国語教材の開発が望まれる。例えば、同一の話題を扱っているテレビニュースのスク립トと新聞記事を教材化し、取り上げられている話題についての意見発表や討論を行う、テレビニュースと新聞記事の差異（メディアとしての特性から、語法、文体、話題の取り上げ方などに至るまで）を相互比較する、ストレートニュース（事実）の部分とコメント（意見）の部分を識別する、などの設問が考えられよう。

もっとも、この段階にまで学習者を導く具体的

指導法が確立されなければ、結局授業では扱われず、宝の持ち腐れとなってしまう可能性もある。従って、教科書自体の改善もさることながら、教える側がこのような設問の趣旨を生かすための指導法の模索に努めることも不可欠である。このような活動は、生涯に亘る学習への態度形成及び能力の育成という学校教育の責務を十分果たす上でも重要である。

c. 推論を要する問いが多いということは、学習指導要領の目標の具現化として評価できるであろう。しかし、書き手の用いる表現技巧にも注目しないと事実を読み違える場合がある。また、書かれている内容が常に正しいとは限らないことを考えると、書き手の表現技巧や評価を問う設問はもっと配置されてよい。こうした作業を意識的に行うことが、批判的に読む力を身につける上では必要だからである。

4. 各教科書の構成と特色

1) CREATIVE READING COURSE

2部構成になっている。第1部には精読を重視したパラグラフ・リーディングの基礎的訓練を意図した8つの課があり、第2部には速読を重視したパラグラフ・リーディングの応用的訓練を意図した20の課がある。精読と速読というそれぞれの目的に応じた適切な読み物を用意している点が特色である。

A. 多肢選択・組み合わせと、B. 空所補充で出現数のほとんどを占め、N. 問答がほとんど無かったため、6区分による分析で該当しているカテゴリーも、f. 書き手の表現技巧についての問いだけとなった。

2) THE CROWN ENGLISH READING

11の課と“RAPID READING”と銘打たれた5編の読み物から成っている。全体的に難易度の高い読み物が多く、また設問も大部分が英語である。教科書としては最高難度というべきものである。

N. 問答が最も多く、B. 空所補充もそれに次いで出現数が多かった。6区分による分析では、全てのカテゴリーに該当する設問があることが分かった。c. 推論を要する問いが最も多かった。

3) DAILY ENGLISH READING

3部構成になっている。第1部には速読のために30編の短い読み物が用意されている。第2部及び第3部には精読のための読み物が数編用意されている。精読と速読という目的別の構成になっている点は1)と同様であるが、先ず速読用の読み物を数多く収載し、しかる後に精読用の読み物を収載している点が対照的である。

A. 多肢選択・組み合わせが最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

4) DREAM-MAKER ENGLISH READING

9つの課と“STORY”と銘打たれた4編の読み物から成っている。

他の教科書は、多肢選択・組み合わせや、空所補充に該当する設問が多い傾向にあるが、この教科書はA. 多肢選択・組み合わせが最も多く、次いでL. 本文の内容についての追跡調査が多かった。6区分による分析では、全てのカテゴリーに該当する設問があることが分かった。e. 個人的な意見が最も多かった。

5) ENGLISH STREET READING

18の課と“Reading for Pleasure”と銘打たれた2編の読み物から成っている。

A. 多肢選択・組み合わせとB. 空所補充が特に多く、次いでJ. 要約が多かった。J. の出現数は18であり、26冊中最多であった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

6) ENGLISH 21 READ ON!

3部構成になっており、それぞれに数課が置かれている。特に第1部では基礎的な読解力の養成を図ることが意図されている。巻末で文法が「読解のヒント」という視点から説明されている点は注目に値する。

N. 問答とA. 多肢選択・組み合わせが特に多く、次いでB. 空所補充が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

7) GENIUS ENGLISH READINGS

5つの単元から成り、各単元には数課と“English for Everyday Life”と銘打たれた日常生活に直接役立つ英語を扱うコーナーが置かれている。それらに加え、“Supplementary Reading”と銘打たれた3編の読み物が添えられている。

A. 多肢選択・組み合わせが最も多く、次いでB. 空所補充が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

8) LEGEND ENGLISH READING

3部構成になっており、それぞれ4つの課と“Further Reading”と銘打たれた読み物がある。読解を効率的に遂行することを重視した内容になっている。

設問数の合計が12と26冊中、最少であった。B. 空所補充とD. 正誤問題が最も多かった。6区分による分析では、a. 語義に即した理解についての問いだけが該当した。

9) MAINSTREAM READING COURSE

5つの単元から成り、それぞれに3課が置かれている。また、各単元間には、“Faster Reading”と銘打たれた読み物があり、その冒頭では所要時間と語数が明示されている。本文の読み方についての具体的な指針も示されている。さらに、文の意味のまとまりを斜線で明示して、本文を文頭から順次読み下していく読み方を身につける一助としている。文法が「英語の発想法」という視点から説明されている点も画期的である。

D. 正誤問題が最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

10) MILESTONE ENGLISH READING

17課から成っている。

A. 多肢選択・組み合わせが最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、a.

語義に即した理解についての問いが最も多かった。

11) THE NEW AGE READERS

4つの単元から成り、それぞれに4課が置かれている。現代的で興味深い話題が多く取り上げられている。

A. 多肢選択・組み合わせ、B. 空所補充、N. 問答が最も多く、次いでD. 正誤問題、L. 本文の内容についての追跡調査が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

12) NEW ATLAS READING

12の課に加え、“Extensive Reading”と銘打たれた読み物が2編ある。各課の終わりには“READING STRATEGY”のコーナーがあり、読解のための戦略が解説されている。さらに、眼球の動き、斜線を用いた読み方（意味のまとまりごとに斜線で区切って読む）、批判的な読み方といったことまで言及されている。

D. 正誤問題とL. 本文の内容についての追跡調査が最も多く、次いでA. 多肢選択・組み合わせが多かった。6区分による分析では、全てのカテゴリーに該当する設問があることが分かった。a. 語義に即した理解についての問いが最も多かった。

13) NEW COSMOS READING

12の課に加え、“Rapid Reading”と銘打たれた読み物が2編ある。各課の終わりでは読解に役立てるための文法が解説されている。さらに読解のための戦略に加え、会話のための戦略も言及されている。

N. 問答が最も多く、次いでA. 多肢選択・組み合わせが多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

14) NEW HORIZON ENGLISH READING

14の課に加え、“Optional Reading”と銘打たれた読み物が2編ある。

A. 多肢選択・組み合わせが最も多く、次いでB. 空所補充が多かった。6区分による分析で

は、c. 推論を要する問いが最も多かった。

15) NEW STAGE ENGLISH READING

3部構成になっており、それぞれに16の課がある。このうち第1部は文法に基づく読解を意図している。

A. 多肢選択・組み合わせとB. 空所補充が多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

16) NEW SUNRISE ENGLISH READERS

21の課から成っている。平易な英文で読解の基礎力を養成することを意図している。

B. 空所補充が最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

17) ONE WORLD ENGLISH COURSE READING

14の課から成っている。文法がコミュニケーションの視点から解説されている。

B. 空所補充、D. 正誤問題とN. 問答が最も多く、次いでH. 該当部分の指摘が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

18) ORBIT ENGLISH READING

文章の長さに応じて設定された4段階から成り、それぞれに幾つかの読み物がある。さらに各段階毎に“Lyrics”、“Ad Corner”、“Jokes&Riddles”といったコーナーが用意され、学習者の興味を喚起している。

A. 多肢選択・組み合わせが最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、a. 語義に即した理解についての問いが最も多かった。

19) PHOENIX READINGS

15の課に加え、“FOR APPRECIATION”と銘打たれた読み物が3編ある。随所で読解に役立てるための文法が解説されている。

I. ポイントのまとめが最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、c. 推

論を要する問いが最も多かった。

20) POWWOW ENGLISH READING

11の課に加え、“SEASONAL TOPICS”と銘打たれた読み物が4編ある。このうち第5課は“FOR FAST READING”として速読練習用の教材と位置付けられている。各課は文法の視点から配列されている。

B. 空所補充とI. ポイントのまとめが最も多く、次いでA. 多肢選択・組み合わせが多かった。6区分による分析では、a. 語義に即した理解についての問いが最も多かった。

21) PROGRESSIVE ENGLISH READING

13の課に加え、“For Further Reading”と銘打たれた読み物が3編ある。随所で読解のポイントが解説されている。

A. 多肢選択・組み合わせとI. ポイントのまとめが最も多く、次いでD. 正誤問題が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

22) RACCOON ENGLISH READINGS

4つの単元から成り、それぞれに12課が置かれている。

B. 空所補充が最も多く、次いでA. 多肢選択・組み合わせが多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

23) SPECTRUM ENGLISH READING

16の課から成っている。本文の重要な部分を色刷りするという画期的な試みもなされている。効率的に読むための技法を身につけられるよう配慮されている。

A. 多肢選択・組み合わせが最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

24) SUNRISE ENGLISH READERS

14の課から成っている。

A. 多肢選択・組み合わせとL. 本文の内容についての追跡調査が最も多く、次いでB. 空所補充が多かった。6区分による分析では、a. 語義に即した理解についての問いが最も多かった。

25) TREASURE LAND ENGLISH READING

10の課から成っている。随所で読解のポイントが解説されている。

B. 空所補充とD. 正誤問題が最も多く、次いでH. 該当部分の指摘が多かった。6区分による分析では、e. 個人的な意見についての問いが最も多かった。

26) UNICORN ENGLISH READING

11の課から成っている。このうち第1課及び第2課の終わりには、聴き取りのための文章が掲載されている。

A. 多肢選択が最も多く、次いでN. 問答が多かった。6区分による分析では、c. 推論を要する問いが最も多かった。

5. まとめと今後の課題

1999年に改訂され、2003年度から年次進行で実施される新学習指導要領の「リーディング」の目標は、「英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」となった。「実践的コミュニケーション能力」の育成という外国語（英語）科全体の方針を踏まえ、「リーディング」の目標にも、「コミュニケーション」という語が明示されるようになった。このようにすることで、「リーディング」を「コミュニケーション」の一環と捉えることの重要性がより強調されている現行学習指導要領では、「英語を理解しようとする積極的な態度を育てる」となっているが、「理解」だけで終わってしまっただけでは不十分である。「理解」する能力を積極的に活用して、知識や論理的な思考方法を身につけたり、発表や話し合い活動などを行ったりすることも必要であるということが、この目標では明示され、強調されている（文部省、1999、pp.56-57）。

さらに現行の「リーディング」の内容としてあげられている③「内容を読み取って、それについ

て自分の考えなどを話したり、書いたりすること」に相当するものが、「まとまりのある文章を読んで、書き手の意向などを理解し、それについて自分の考えなどをまとめたり、伝えたりする」となり、この具体的活動として「文章に表現されている内容が事実であるか、書き手の意見であるかを正確に読み取り、それについて自分がどう考え、どんな意見や感想を持ったかを話し合ったり、書いて伝え合ったりする」ことが想定されている（文部省、1999、p.59）。上述の設問の分析ではあまり見られなかった「事実と意見の識別」であるが、これを機に今後の教科書でこうした設問が増加することを期待したいところである。批判的な読みの第一歩として非常に重要だからである。

また、この新学習指導要領では、言語が使用される具体的な場面と働き（「情報を伝える」、「考えや意図を伝える」等）がかなり詳細に示されている。具体的な場面の一例である「多くの人を対象にしたコミュニケーションの場面」では、「本、新聞、雑誌、広告、ポスター、ラジオ、テレビ、映画、情報通信ネットワークなど」を使用した受信・発信、また音声面、文字面の双方を考慮したコミュニケーションの場面を設定して指導することが奨励されている（文部省、2000、p.78）。この部分は、外国語教育におけるメディア・リテラシー育成の指針となり得るであろう。この点に配慮した教科書が多数出てくることを期待したい。

ここでは分析結果を通して、批判的な読みの必要性を指摘することに重点を置いてきたが、批判的な読みは大学で論文執筆のために先行研究を検討する際にも不可欠である。高等学校段階でこの基盤を築いておくことが、大学での学習をより多きものにする上でも是非必要である。

このように新学習指導要領は、今回の分析結果で明らかになった問題点の是正策を講ずる上で、有効な指針になり得るといえる。しかし、その第一の具現化の場である教科書にそれが十分反映されなければ、全く無意味である。教科書の出来如

何が実際の指導上大きく影響することに深く思い致すべきである。

今回はpost-reading段階の設問を分析対象としたが、リーディング指導の問題を検討する上では、pre-reading段階やwhile-reading段階の設問との関連、新学習指導要領施行後の「リーディング」の教科書との比較、さらには中学校・大学でのリーディング指導との比較なども行う必要がある。これらについては、今後の課題としたい。

注

1)「ストラテジー」(strategy)とはそもそも、目的の遂行のための長期に及ぶ総合的な戦術という軍事用語である。読解の場合でいう「ストラテジー」もこれとはほぼ同様で、迅速且つ効率的に「読解」という目的を遂行するための手順を意味している。「実戦」にせよ、「読解」にせよ、場合によっては当初のストラテジーを部分的に修正していくことが必要となることから、可変的で柔軟な性質のものであり、固定的な規則ではない。それゆえ、一種の「作業仮説」であるとも考えられる。

謝辞

本研究は、拓殖大学大学院修士課程（指導教官：名和雄次郎教授）における研究を発展させたものであり、教育学関連学会連合第6回全国大会での発表に加筆修正したものである。また、その一部は、科学研究費補助金による支援による。関係各位に感謝いたします。

引用文献

- Barnett, M. A. Teaching Reading Strategies : How Methodology Affects Language Course Articulation. Foreign Language Annuals, 21(2), 1988, pp.109-119.
- Barnett, M. A. More than Meets the Eye : Foreign Language Reading : Theory and Practice. Prentice Hall. 1989, pp.51-53
- 文部省 高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編. 教育出版 1989, pp.6-10
- 文部省 高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編. 開隆堂 1999, pp.3-9, pp.56-57, p.59
- Nuttall, P. D. ESL Reading Pedagogy. The MIT Press. 1996, pp.72-74
- 天満美智子 英文読解のストラテジー. 大修館

1989, p.75

- 寺内正典 「読解指導におけるtop-down processing approachとbottom-up approachとの比較に関する一考察」 法政大学英文学誌34号、1993, pp.35-77
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ 学習者中心の英語読解指導. 大修館 1992 pp.25-26

使用教科書

- 赤祖父哲二他 ONE WORLD ENGLISH COURSE READING 教育出版 1996
- 安藤昭一他 MAINSTREAM READING COURSE 増進堂 1996
- 荒木一雄他 THE NEW AGE READERS 研究社 1996
- 羽澄英治他 ENGLISH STREET READING 第一学習社 1996
- 本庄寛他 NEW STAGE ENGLISH READING 池田書店 1996
- 本間長世他 THE CROWN ENGLISH READING 三省堂 1996
- 小林裕子他 ENGLISH 21 READ ON! 東京書籍 1996
- 小林裕子他 NEW HORIZON ENGLISH READING 東京書籍 1996
- 九頭見一士他 PHOENIX READINGS 開隆堂 1996
- 中山理他 PROGRESSIVE ENGLISH READING 尚学図書 1996
- 越智道雄他 DREAM-MAKER ENGLISH READING 三省堂 1996
- 小野寺健他 RACCOON ENGLISH READINGS 筑摩書房 1996
- 大浦暁生他 NEW COSMOS READING 三友社 1996
- 斎藤次郎他 NEW SUNRISE ENGLISH READERS 旺文社 1996
- 斎藤次郎他 SUNRISE ENGLISH READERS 旺文社 1996
- 塩沢利雄他 SPECTRUM ENGLISH READING 桐原書店 1996
- 末永国明他 POWWOW ENGLISH READING 文英堂 1996
- 末永国明他 TREASURE LAND ENGLISH READING 文英堂 1996
- 末永国明他 UNICORN ENGLISH READING 文英堂 1996
- 鈴木英一他 LEGEND ENGLISH READING 開拓

社 1996
高梨健吉他 DAILY ENGLISH READING 池田書店 1996
高梨庸雄他 ORBIT ENGLISH READING 三省堂 1996
田鍋薫他 CREATIVE READING COURSE 第一学習社 1996

谷本誠剛他 MILESTONE ENGLISH READING 啓林館 1996
山本証他 NEW ATLAS READING 三友社 1996
米山朝二他 GENIUS ENGLISH READINGS 大修館 1996

(2001. 4. 2 受稿 2001. 7. 27 受理)

Teaching Method for Reading Comprehension Focusing on Reading Tasks : Some Issues in Analyzing Textbooks for READING

Keitaro YAGI¹⁾ · Hideko ITOH²⁾ · Kazuhiko HATANO²⁾

This paper attempts to classify and analyze various types of post-reading tasks presented in 26 high-school reading textbooks, in order to examine the problems of teaching reading comprehension. We believe that this provides a useful starting-point from which to study the teaching of academic reading in higher education.

Key requirements in teaching reading comprehension include a greater awareness of the actual processes involved, and the development of appropriate tasks to help students to master those processes.

Judging from the results of the analysis, these textbooks put special emphasis on post-reading tasks intended to check students' comprehension.

Key words:

Textbooks, Tasks, Course of Study, Critical Reading, Reading Process, Teaching Procedure for Reading Comprehension, Media Literacy

1) Graduate School of Information Media, University of Library and Information Science

2) National Institute of Multimedia Education